

6. 付編(2) 猪鼻城跡土壘中出土の蔵骨器群について

今回、亥鼻3丁目の発掘調査の成果を報告するにあたり、埋蔵文化財センター所蔵の過去の調査の出土遺物も再検討を行った。さらに昭和48年に主郭土壘中から出土した蔵骨器他の千葉市立郷土博物館蔵の資料についても検討する機会を得た。そのうち2点の蔵骨器は郷土博物館に常設展示されているが、同時に出土したその他の土器・陶器類は一部紹介されているのみである(築瀬1998)。特に破片となっていた性格不明の1個体分の陶器については、これまでまったく注目されることがなかったが、今回、接合・復元を行い、詳細に検討し、山本信夫氏にご教示いただいた結果、中国製の褐釉四耳壺であることが確認された。このような遺物が出土していたということは、この地域の歴史理解にとって重要な知見である。これまで正式な報告がないこれらの昭和48年の出土遺物について、ここに掲載することとした。今回確定した出土遺物は、古瀬戸灰釉四耳壺1点、常滑壺1点、褐釉四耳壺1点、常滑甕腹部片1点、蔵骨器蓋3点である。この他、3点の蔵骨器に内蔵されていた火葬骨については、3丁目公園地点の人骨と共に鑑定を依頼した(付編(3)参照)。

1. 出土状況

昭和48年(1973)11月に主郭の南側の土壘上に無線受信塔を設置するために、直径1m程度の穴を掘削したところ、地下約1.1mのところから蔵骨器が出土した。取り上げられたのは完形品2点と破片資料などだが、もう一点常滑窯製の蔵骨器(6b型式相当)が横穴状の空間に存在することが確認されたが、これは取り上げずに埋め戻された。取り上げられたほぼ完形の2点の蔵骨器にはいずれも八分目ほどの火葬骨が入っており、カワラケの小皿を蓋としていたという。当初、不明確だった蓋と本体の組み合わせは、今回蔵骨器内の火葬骨中からカワラケの破片が回収されたため、その組み合わせが確定できた。

2. 出土遺物(第21図)

1・2はカワラケの小皿で、1が1号蔵骨器、2が3号蔵骨器の蓋として使われていたものである。2点とも大きさや製作技法・胎土など非常に共通性の高いもので、同じ産地のものと思われる。底部には右回転の糸切り痕が確認でき、内面には横ナデは加えられない。口縁部を斜め上方に立ち上げ、やや口唇が薄く作り出される。2は口縁の屈曲がやや強く、こちらの方が古いタイプとなるかもしれない。3は、2号蔵骨器の蓋である。土師質土器の底部で、胎土は古代の土師器と類似性が強い。右回転の糸切りにより底部が切り離されている。これらの蔵骨器の蓋はいずれも壺の口径よりも大きさが小さく、落とし蓋として使われていたものである。4は古瀬戸の灰釉四耳壺である。瀬戸の編年では前期様式Ⅱb期(13世紀前半)に比定される。5は褐釉四耳壺で、12世紀代に製作されたもので(山本・山村1997)、中国南部浙江省付近が生産地という。太宰府の分類では、耳壺(四耳壺)V類に相当する(太宰府市教育委員会2000)。内外面に釉薬がかけられているが、焼成が良くないため内面などは発色が悪い。体部下部には、焼成時の白っぽい粘土による目跡がみられる。底部は内側を削り込んだ高台になっている。口縁のつくりや四耳のある肩の沈線も簡略化が認められ、また全体のフォルムもシャープさが失われつつあるので、同じタイプの四耳壺のなかでは少し新しいものとなる。この蔵骨器は火熱を受けているが、割れ口との関係から破片となってから火を受けたことが確認できる。このため、この蔵骨器は本来の埋納場所から動かされている可能性がある。火葬骨も量的に少ない。6は常滑窯の壺で常滑の編年では、6a型式(13世紀第3四半期)に比定される。なお、内蔵されていた火葬骨は、鑑定の結果、成人女性のものであることが明らかになっている。7の常滑甕は、接合してひとつの大きな破片となったものである。

3. 蔵骨器中の混貝土について

保存されていた蔵骨器中の火葬骨は、一部の砂を除くとローム層の小ブロックが少し含まれている以外は、ほぼ火葬骨のみからなり、埋没中の土砂の流入がほとんどない状態で埋納されていたことが推定できる。蔵骨器の上部を覆うか蓋をしていたものと思われるが、供伴したカワラケはいずれも口径より小さく、土砂流入を防ぐ役にはたたないので、伴出した常滑甕の破片が蔵骨器の上部を覆っていた可能性もあろう。火葬骨を仕分けていった結果、蔵骨器内にはハマグリや巻貝などの貝殻と若干の砂が含まれていることが確認できた点も重要な所見である。当初、周辺の土壌の混入であろうと考えていたが、成田層中の自然貝層に由来すると思われる貝殻が、周辺の状況から自然に蔵骨器内に混入する状況は想定できない。蔵骨器には意図的に土砂を加える作法があるとされるので（『吉事次第』『吉事略儀』群書類従雑部所収、福山1983）、猪鼻城跡の蔵骨器の土砂も意図的に納入されたものであろう。しかし、これが上述の文献にみえる土砂加入の作法の事例に相当するのかは、もう少し他の資料の検討が必要である。

4. 蔵骨器群の歴史的意義

猪鼻城跡の蔵骨器については、従来より千葉氏との関連が推定されていたが、今回確認された褐釉四耳壺の存在により、猪鼻城跡の墓地は、千葉氏のものである可能性がさらに高くなった。特に褐釉四耳壺はその希少性からみて、そうしたものを手に入れる機会があったのは、この地の領主千葉氏以外には考えにくい^(注)。褐釉四耳壺がどのような経緯で千葉に招来されたのかは不明であるが、おそらく中央との繋がりがあった千葉氏が、その地位により手に入れたものであろう。したがって、ここの墓は千葉氏のものともみて大過あるまい。

『千葉大系図』によれば、千葉常胤は正治3年（1201）3月24日に83才で卒し、「下総国千葉山」に葬られたという。それを千葉市稲毛区園生町の長者山とする説もあり、大日寺にあった千葉氏歴代の墓といわれる五輪塔群についても園生町または萩台町から移されたものともされるが、そこは千葉氏の本拠堀内から離れすぎていると思われる。素直に考えるなら、『千葉大系図』でいう千葉山とは猪鼻山のことであった可能性が高く、千葉氏の墓は、千葉氏の本拠を見下ろす猪鼻の地がふさわしいといえよう。

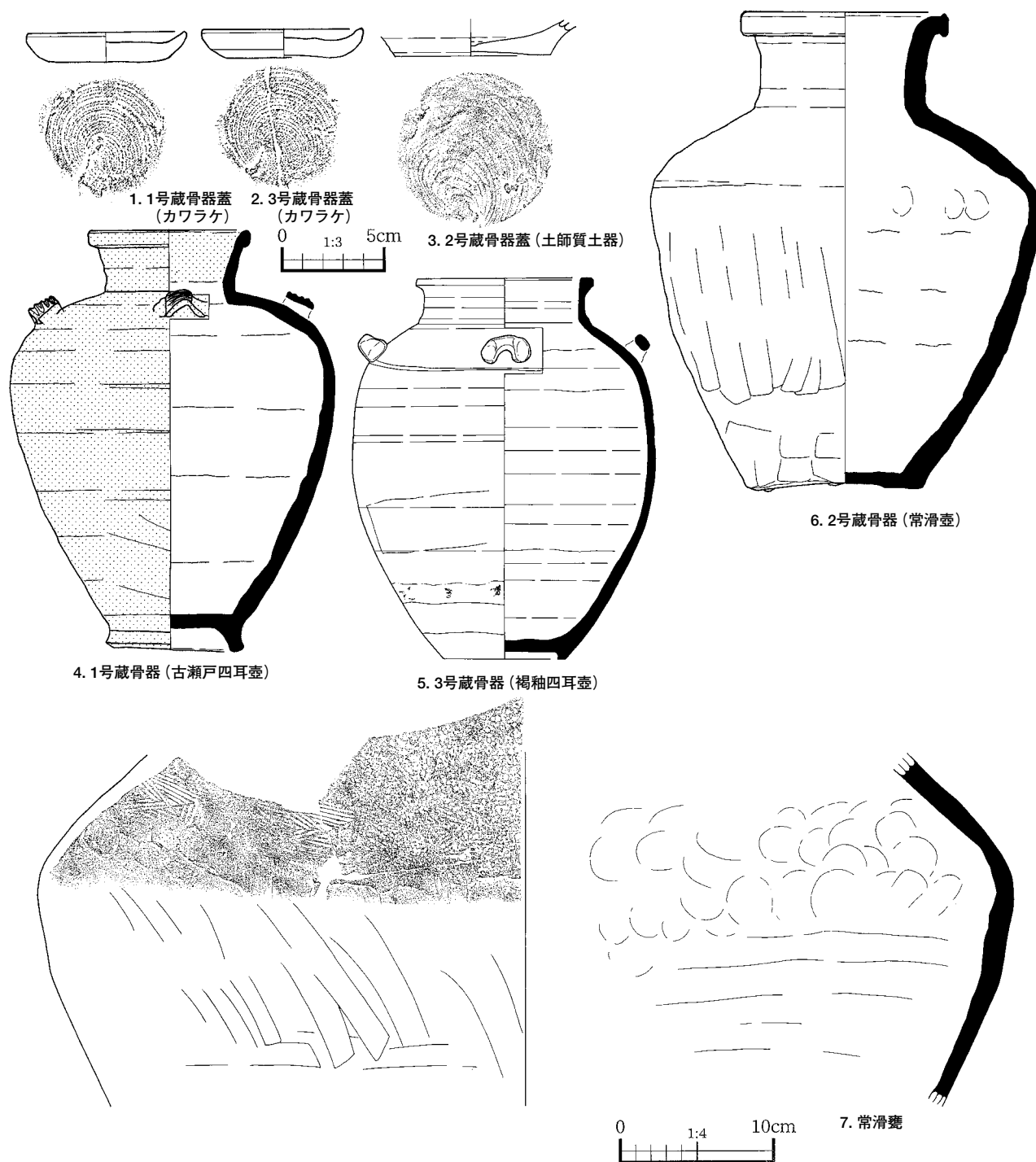
3点の蔵骨器は、製作された時期がそれぞれ3号：12世紀、1号：13世紀前半、2号：13世紀後半であり、製作時期は一定ではない。しかし、1号と3号の蔵骨器は、蓋に使われていたカワラケの小皿はほぼ同時期のもので、13世紀の前半の埋納とみることができる。2号はそれらよりやや新しくなるが、それでも13世紀の中頃に埋められたとみてよい。つまりこれらの蔵骨器が埋納されたのは、鎌倉幕府創設からさほど時間的へだたりのない千葉氏の最盛期ともいえる時期に対応する。当時の千葉氏に関連する遺物は、現在千葉にはほとんど残されていない状況にあって、千葉氏との関連が推定されるこの蔵骨器群は非常に貴重なものといえる。1号と2号蔵骨器は既に平成13年6月20日付けで千葉市文化財に指定されているが、今回確定したすべての遺物を一括して指定がなされるべきであろう。

（注） 現在、千葉県内で中世前半期の褐釉壺の出土例としては、千葉市黒ハギ遺跡（未報告）・光町笹本城跡（道澤2000）、鋸南町下ノ坊遺跡B地点（高梨他1990）、成田市小管天神台I遺跡（小牧他1998）があげられる。

道澤 明 2000『笹本城跡・城山遺跡－ひかり工業団地内埋蔵文化財調査報告2－』（財）東総文化財センター

高梨 俊夫他 1990『下ノ坊遺跡B地点発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター

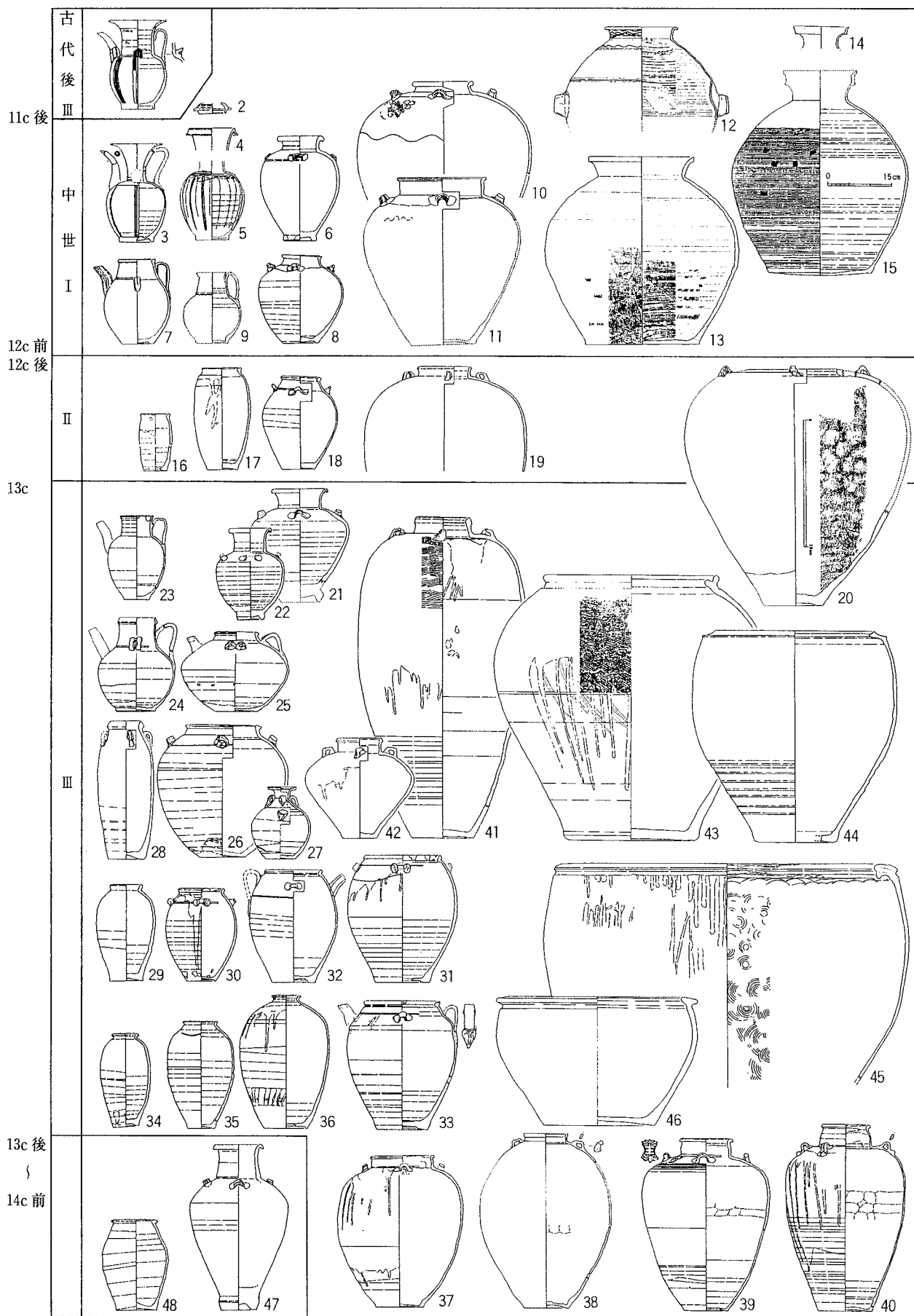
小牧美知枝他 1998『成田ビューカントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター



第21図 猪鼻城跡土壘中出土蔵骨器他

表1 土壘中出土蔵骨器関連遺物観察表

番号	種 別	大 き さ (cm)	焼 成 ・ 胎 土 等	備 考
1	カワラケ	口径7.8,底径5.4,高さ1.3	焼成やや良・明褐色胎土・やや緻密	1号蔵骨器蓋・底部右回転糸切り・2と大 き さ・胎土・形態がほぼ同じ
2	カワラケ	口径7.8,底径5.4,高さ1.3	焼成やや良・明褐色胎土・やや緻密	3号蔵骨器蓋・底部右回転糸切り
3	土師質土器	口径-,底径7.5,高さ(1.7)	焼成やや良・明褐色胎土	2号蔵骨器蓋・底部右回転糸切り・見込み少しへこむ・碗形の土器か。
4	古瀬戸四耳壺	口径10.6,底径9.1,高さ27.4,最大径21.1	灰釉	完形品・古瀬戸前Ⅱb期 (13世紀前葉)
5	褐釉四耳壺	口径11.3,底径8.0,高さ24.7,最大径19.5	明茶褐色・茶褐色～暗緑色釉・胴部下部に目跡	全面施釉。内面にも施釉しているが、焼成不良のため、ガラス化せず。遺存率約60%。底部削り出し高台。破損後に火熱を受けている。中国南部産 (12世紀)
6	常滑壺	口径13.5,底径11.6,高さ31.0,最大径25.3		完形品・6a型式 (13世紀第3四半期)
7	常滑甕	口径-,底径-,高さ(23.4),最大径63.6	灰褐色	胴部片・7点破片接合・肩に押印文・体部縦方向ハケ目



No.8(福岡県京都郡勝山町松田経塚)が猪鼻城跡3号蔵骨器と同タイプ

第22図 貿易陶磁・貯蔵具編年図 (山本・山村1997より)